

★今週の聖句

| | |
|--|----------------|
| 「道で話しておられるとき、また聖書を説明して下さったとき、わたしたちの心は燃えていたではないか」 | ルカによる福音書 24:32 |
|--|----------------|

★ねらい

「復活のキリストの方から、主イエスの方から我々に出合ってくださいることを伝える」。

★説教

足取り重く、二人の弟子は歩いていた。エマオ村は、エルサレムから 11 km (=60 スタディオン) ほどの距離。二人は、主イエスの十字架の出来事について、話していた。対話をしているというよりも、互いにぼそぼそと自問自答している様子ではなかったか。そのとき、いつの間にかもう一人、彼らと一緒に歩いている人がいた (13-16 節)。時が時でもあり、弟子たちは心を閉ざし、深く傷ついている。

この記事の重要な強調点は、まず、復活のキリストが、ご自身を顕してくださいるのに、彼らには、目が遮られて、それがイエスだとは分からなかった、「見知らぬ人」であった、ということにある。「目が遮られて」という表現で、ルカは霊的な目のことを言っているのである。

彼らは、近づいて話しかけられた「見知らぬ人」を警戒するでもなく、心を開いて対話を始める。まず、主イエスが「歩きながらやりとりしているその話は何のことか」と問いかけ給う。それにたいして「二人は暗い顔をして立ち止まった。」

二人は、絶望していたのだ。望みをかけていたものが潰えたとき、私たちは自問自答する。あれは何だったのだろうか。自分は一体どこにいるのだろうか。自分は何を支えに生きて行くことが出来るのだろうか。自問自答というのは、モノローグであり、独り言である。二人は道々会話をし、議論してきたのだが、それは交わらない会話、交わらない議論であった。互いに、独り言を言い交わしていただけ。目が遮られていたからである

我々もしばしば独り言を言う。心の中をのぞいてみるといつも独り言を言っている。特に心に挫折感があるとき、引っかかるものがあるとき、苦しいものがあるとき、憎しみや恨みがあるとき、総じて心の平安が乱されているときは、激しく独り言を言っているのだ。暗い顔をして言っているのだ。弟子たちのように、友と話していても、独り言を言っていることがしばしばである。

けれども、独り言というのは実は存在しない。頭の中をぐるぐるぐるぐる独り言が回る、そう思うことは度々であるが、その独り言を見知らぬ人は聞いている。そしてその方と知らず知らずに対話をしているのだ。独り言を言うとき、それは自分を超えたお方との対話なのだ。見知らぬ御方がだれであるか——。私たちは、復活のイエスだと知っている。

わたしの生涯は煙となって消え去る。骨は炉のように焼ける。打ちひしがれた心は草のように渴く。わたしはパンを食べることすら忘れた。わたしは呻き、骨は肉にすがりつき、荒野のみみずく、廃墟のふくろうのようになった (詩 102 編 4-7 節)。

詩編詩人は、惨めな自分をこのように歌っている。独り言であり、深い呟きである。けれども、完結した独り言ではなく、自分が、だれに向かってその心情を吐露しているかを知っている。

独り言が終わる頃に、彼の心ははっきりと祈りの心になっている。「主よ、あなたはとこしえの王座に着いておられます。御名は世々に渡って唱えられます」(102 編 13 節) と、信頼の言葉、信頼の祈りに転じるのである。独り言、そのときこそ、魂は主との対話を促し、心は主と対話しているのだ。それは祈りなのだ。

弟子たちも、失意の中で、思いのたけをこの身知らぬ人に話した。順々に話した。その見知らぬ人に、祈るようにして話したのだ (⇒28-24 節)。

主イエスはそれに答えられます。つぶやきが、はっきりと対話の形を取ってくる。イエスの応答を聞いたからである（⇒25-27節）。

独り言のつぶやきが、主との対話となり、そして答えをいただく。これは私たちがまだイエス・キリストとの出会いを与えられる前から、行なっていたことでもあるのではないか。心にわだかまりがあるとき独り言を言う。挫折があるとき独り言を言う。大いに言ったらよい。それを聞いておられる方がすぐ傍におられるのだから。そして無意識のうちに、そのお方との対話を始めているのだ。だから、そのすぐ傍のそのお方を意識すれば、その独り言は祈りとなり、対話となる。そして、必ず、その時その時の答えが与えられる。

そのお方はイエス。独り言をしっかりと聞き、叱責し、けれども優しくその意味を説き明かしてくださった方がイエス、挫折した孤独な心と対話をしてくださっていた方。私たちの独り言をしっかりと受け止めてくださる御方、そのお方がイエス、復活されたキリストなり。それを見るのは、聖霊によって開かれた心の目をおいてほかにない。

暗い顔をして、独り言をつぶやいていた弟子たちの心は、復活の主、イエスとの対話の中で、識らずして燃えていたのだ。独り言は、それで完結すれば、心に燃えるものは何もなく、ただ寒々とした荒野を彷徨うばかり。けれども、その独り言を主が聞いてくださることを知り、祈りとなるなら、その対話が深まれば深まるほど、心に燃えるものも与えられる。人知を超えた神の平安が、おとずれ、静かに心が燃えるのだ。復活のキリストが語りかけ、働きかけてくださるのだから。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

□ 1 1 5 A (B) 番

□ 5 4 番 (改訂版)

やってみよう

燃える心を書こう

材料

- ・色画用紙(赤)
- ・クレヨン、マジック
- ・ハサミ

お弟子さんたちはイエス様からお話を聞いたとき「心が燃えていた」と話しています。皆さんも心が燃えることを考えて見ましょう。そして色画用紙（赤）を炎の形に切って、そこに自分の心が燃えることを書いてみましょう。

①色画用紙（赤）に炎の絵を描き、切り取ります。

②自分の心が燃えることを書きます。

話してみよう

- ・話した時、なぜ2人の「心は燃えた」のでしょうか。
- ・「心が燃えた」らどんな風にしたくなるのでしょうか。

★今週の聖句

| | |
|---|---------------|
| 「イエス御自身が彼らの真ん中に立ち、「あなたがたに平和があるように」と言われた。」 | ルカによる福音書24:36 |
|---|---------------|

★ ねらい

「主イエスが我々の真ん中に立ってくださること、からだの復活を伝える」。

★ 説教

弟子たちにとって、主の御復活に信じるようになることは、そう簡単なことではなかったようだ。確かにそうだろう。死人が復活するなど、いくら2000年前の古代のことだとしても、前代未聞のことだからだ。

ただ弟子たちはそれでも、主イエスと行動をしているときに、特別な体験を与えられていた。あのラザロの復活、或いはヤイロの娘の復活である。それなのにイエスの復活には半信半疑です。一般に、落ち目になったり、追い詰められたりしている集団は、心も閉ざし合い、疑心暗鬼になるものだ。悲劇は、それを一緒に経験した者を、強い絆で結ぶのではなく、相互不信と、非難、中傷の中で分裂させる方向に働く。そうして人々は深い傷を負って散り散りになる。

教会も、しばしばそういう経験をするところがある。順風満帆の時は、皆仲良く、逆風の時は、分裂する。人間の常である。弟子たちも、一緒にはいても、互いに疑心暗鬼であった。主イエスがそのような死に方をされて、求心力がなくなった。がたがたである。だれが第2のユダになるかわからない。その手引きで、いつユダヤ当局や、ローマの兵士が、踏み込んで来るかも知れない。それでも彼らは集まっている。集まっているが、みんな孤独。集まっているからこそ孤独。そんな中である。復活の主がご自身を顕してくださったのは（⇒24章36節）。

求心力を失った彼らの、真ん中に主イエスは立ってくださった。もう一度真ん中に立ってくださったのだ。これこそ、教会の原型なり。教会とは何か。問題多い弟子たちの真ん中に、復活の主が立ってくださっている群れであるにほかならない。

けれど弟子たちはまだ、半信半疑である。イエスは真中に立ってくださっているのに、彼らは恐れに留まっている。これもまた教会の現実の一面でもあろう。本当はもう恐れるものは何もない。でも、弟子たちは自分の恐れを投影して、復活の主を、こともあろうに幽霊だと見誤ってしまう（⇒37節）。心の目は、自分の心が暗ければ暗い世界を、恐れがあれば恐ろしい世界を見るもの。弟子たちの目はイエスを亡霊だと見てしまった。

弟子たちが、エルサレムに来て以来失っていたものは平安である。平和な心である。だからこそ主はまず弟子たちに「あなたがたに平和があるように」と言われます。もう大丈夫。わたしはここにいる。平和であれと。そして主は言われる（⇒38-42節）。

そのときの光景が、ありありと目に浮かぶ。一匹の焼き魚をさも美味しそうに手にとって食べられる主イエス。弟子たちがあつけにとられてポカンとしている中を、むしゃむしゃ魚を食べておられる主イエス。弟子たちも、ガリラヤ湖畔での、楽しかった食事のひとときを想起する。この光景を椎名麟三が、神のユーモアと表現したことは有名だ。まさにそうであるかも知れない。永遠なお方が、時間の中で、一匹の魚を美味しそうに食べられているという矛盾。ユーモアというのは幸福な矛盾である。弟子たちの心には喜びが溢れて来る。それにしてもなぜ、イエスはこのように、手や足、肉や骨、など、体を強調なさったのだろうか。いずれ、その姿も消えて、この世ではもう見られなくなるのに。

使徒言行録では、サウロ、後のパウロの、復活の主との出会いを伝えている。彼の場合は、主のお姿を見ることはなく、声に聞いただけ。けれどもパウロは、体の甦りについて、霊のからだについて熱く語る（⇒Iコリ15章42-45）。

福音書記者たちもパウロも、復活をただの霊魂不滅とは違うと考えている。霊魂不滅というのは、体は死んでも、魂は不滅と考えるもの。古代のギリシャ哲学者のプラトンなどもそう考えていた。それに似たものが、輪廻転生の考えです。霊魂は、涅槃に行くまでは、色んな生き物に姿を変えて、転生して行くという考え。ヒンズー教や仏教がその考え方をします。

復活の使信は、それとは違う。死ぬのは、肉体だけではなく、魂も死ぬのだ。キリストは陰府に降られた。陰府に降られたと言うことは、魂の死も経験されたということ。肉体は死によって土に帰るが、魂は死んでも帰るところがないのだ。土に帰ることも、無に帰ることも出来ず、神から離れた、虚無の世界を彷徨うばかり。

復活というのは、まさにその魂の死からも復活し、永遠の霊の体をいただくことなり。キリストが死者の中から復活されたと言うのは、そのことなのだ。

キリストの命にあずかる者は、肉体の死と同時に襲ってくる魂の死を一挙に超え出て、復活にあずかる。すべてを失った弟子たちが、蘇られたキリストにお会いして、失ったものが何一つなかったことを知らされたように、私たちも、死によって失うものは何一つない。すべては元どおり、いや、それ以上なのだ。

むろん失うべきもの、失ってよいものは失う。魂の迷いはなくなる。虚栄や、強欲や、傲慢や、憎しみや、絶望や、苛立ちや……それら、魂を汚すものはすべて消えてなくなる。けれど、共に食卓に着くときの喜びや、神と共にある楽しみ、讃美の喜び、美しいものへの感動、真理の楽しみ、愛と平安の充足、それらのものは、この世で経験するものの幾百倍も与えられるのだ。愛する者との再会も、どんなに心満たされることだろう。弟子たちが、主を見て喜んだように、私たちも、愛する者と会って喜び、何にも失っていなかった、全てはもとどおり、いやそれ以上であることを味わわせていただこう。

★分級への展開

さんびしよう

*讃美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

□ 115 B (A) 番

□ 88 番 (改訂版)

やってみよう

平和を作り出す人々を作ろう

材料 ・長い紙 ・鉛筆、クレヨン、マジック ・ハサミ

イエス様は「あなたがたに平和があるように」といわれています。

皆さんも平和について考えて見ましょう。

そして、平和を作り出す人々を作ってみましょう。

- ①長い紙を折ります。
- ②人の形を書きます。
- ③ハサミで切り取ります。

話してみよう

- ・ イエス様が現れて、お弟子さん達はどんな気持ちだったのでしょうか。
また、どんなことをイエス様に言ったと思いますか。

★今週の聖句

| | |
|---|-----------------|
| 「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。」 | ヨハネによる福音書 10:27 |
|---|-----------------|

★ ねらい

「私たちはキリストのもの（＝キリスト者）であり、このキリストの声に聴き従って日々歩む者であることを伝える」。

★ 説教

イエスがメシアなのかどうかを巡っての、イエスとユダヤ人とのやりとりが、このテキストの内容。場所は神殿の境内、ソロモンの回廊。イエスはユダヤ人たちに取り囲まれている。主としてイエスに敵対的な姿勢を見せている、祭司や律法学者などの神殿勢力のことを、ヨハネは一括してユダヤ人と呼んでいる。彼らは言う（⇒10章24節）。

彼らは今不安なのだ。九割方は、この男がメシアであるはずもない。けれど、一割方は、もしかしたら、そうかも知れないという、可能性も否定でないでいる。彼らのかちかち頭には、勘に障ることばかりだが、名状し難い魅力、またガリラヤやユダヤ近郊で行なってきたいくつもの奇跡、それらはイエスがただ者ではないことを物語っている。

けれど彼がメシアであったら、神殿勢力にとっては困ったことになる。自分たちの既得権や、特権意識や、忠誠心が根本から揺るがされることになる。だから「そんなはずはない」と思うのが九割。でも「もしかしたら」と思うのが一割。

「はっきりそう言いなさい」と言うのは、そう言えば認めると言うことではなく、そう言えば「神を冒涇した」という言質を取ることが出来るからだ。自分から「わたしはメシアだ」と言わせ、それを神への冒涇として断罪することで、自分たちの不安を払拭しようとしている。

ここには出ていないが、福音書は、イエスに対する敵対意識の裏に、ユダヤ人指導者たちの「妬み」があったことを指摘している。マタイでは、それを見抜いていたのがピラトであったことも述べている。ピラトが、強盗の罪で捕らえられていたバラバとイエスのどちらを釈放して欲しいかと問い返したとき、彼らは「バラバを」と答えた。マタイは、彼が問い返したのは「人々がイエスを引き渡したのは、ねたみのためだと分かっていたからである」と記している。イエスを十字架に追いやった重要な動機の一つが、「妬み」であったことは確かである。

主イエスもまた、プライドの高い男たちの嫉妬によって、十字架に追いやられたという一面が色濃くある。それだけ嫉妬というのは罪深く、目を曇らせ、耳をふさぎ、心を歪めるということ。嫉妬心は女にもあるものだ。主イエスは答えられる（⇒26節）。

「あなたたちは信じない。わたしの羊ではないから」。

聞きようによっては、何と冷たい言葉だろうか。信じないあなたたちは、メシアのものではない、キリストのものではない、救い主のものではない、と言われているのだ。そしてこう言われる（⇒27節）。

わたしの羊は、わたしの声を聞き分ける。わたしは彼らを知っており、彼らはわたしに従う。

キリストに信じる者は、キリストの声を聞いた者。その声が、どんな声だったか、年月が経って、もうはつきりと思ひ起こすことは出来ないかも知れない。と同時に、わたしたちは毎週、このようにしてキリストの言葉、その声を魂に聞いている。それは、あなたがたが「わたしの羊」だからと言ってくださっているのだ。

なぜ、あの人、この人ではなく、わたしなのか。理由は分からない。神に信じ、キリストに信じ、キリストが死人の中から復活なさったことに信じる。なぜそうなったのか、理由は分からない。

それに信じなくても、不自由なく生きている人は数多い。それに信じなくても、堅実な社会人として、世のため

人のために生きている人は数多い。それに信じなくても、ちゃんと、立派な死を死んでいる人は数多い。そういう人たちに比べて、わたしたちが特別際立っているものはないのだ。この世では。そう、この世では。

けれども、私たちはキリストなしには生きられない。主なるイエスはわが宝なり。なぜそうなのか。それは選びによるもの。きっと深い考えがあって、わたしたちは選ばれたのだ。私がキリストを選んだのではなく、キリストが私を選ばれたのだ。私たちがキリストのことを知っているよりも、はるかに深く、はるかに徹底して、その愛も、その罪も、キリストはご存じなのだ。その上での選び。貴方はわたしの羊。その断言。それが選びなり。

選びは約束である。その約束はこうである（28-30節）。

父のものであり、父がキリストに与えられたもの、それはキリストの無限愛。永遠の命を与える愛。それはすべてのものより偉大である。すべてのものとは、人間を滅ぼす悪しき力のすべてのこと。

何はともあれ、いったい誰が、キリストが死者の中から復活し、再びこの世に姿を顕してくださったことに信じる事が出来るだろうか。けれども、信じる者たちがいる。信じるように心を開かれた者たちがいる。選びによってキリストの羊とされた者たちである。私たちはその一人、ひとりとしてここに居るのだ。

なぜ私たちがなのか、それは分からない。ただ、私に対する特別の憐れみによって、特別の恩寵・恵みによってである。今週もまたキリストの声を聞きつつ生きてゆこう。雑音を沈め、キリストの声を聞きつつ、永遠の命の中を生きてゆこう。

★分級への展開

さんびしよう

*讚美歌は”こどもさんびか”（日キ版）より

□ 4 9 番

□ 1 2 4 番（改訂版）

やってみよう

羊を作ろう

イエス様は「わたしの羊はわたしの声を聞き分ける」と言ってくださいました。

その羊を作ってみましょう。

材料

- ・ 画用紙
- ・ 鉛筆、マジック、クレヨン
- ・ ハサミ
- ・ 綿（手芸用）
- ・ 木工用ボンド（手芸用ボンド）

①画用紙に羊の絵を書き、切り取ります。

②羊の体の部分に木工用ボンドを使って綿を貼ります。



話してみよう

- ・ 「わたしの羊」とは誰のことでしょうか。

★今週の聖句

「わたしがあなたがたを愛したように、あなたがたも互いに愛し合いなさい。」

ヨハネによる福音書 13:34

★ ねらい

「神が愛であること、主イエスの愛の中をこそ生き・生かされることを伝える」。

★ 説教

ヨハネによる福音書の特徴の一つは、神の栄光、キリストの栄光を力強く語っていること。人の目には、惨めに映り、負の条件と思えるようなことも、神の栄光を表わすためという事で一貫している。

愛弟子の中から、自分を裏切る者が出るという、師としては最も悲しくも恥ずかしい事態である。そしていよいよ今から耐え難い恥と苦痛を受け、十字架の道を歩むとき。それを目撃する者たちが、イエスを見て失望し、躓き、直弟子たちも皆、彼から逃げ去る事態がすでに明らかなき。だから、目に見える姿は、栄光が潰えるその時です。そのようなとき、主イエスは「今や人の子は栄光を受けた」と完了形で語られる。「神も人の子によって栄光をお受けになった」と。

人間的には惨めな事態の直中で、主イエスが神に栄光を、神がイエスに栄光を、栄光と栄光とが輝き合い、反射し合っている、そのような光景が語られている。

ヨハネ伝は、このようなイエスを私たちに伝えている。その輝きは人の目には見えない。人の目に見えるのは、栄光の姿ではなく卑賤の姿。でも卑賤の姿の中にあるキリストの魂の輝き、愛の勝利の輝き、その輝きをヨハネは私たちに伝えているのだ。

さて、十字架につかれる前、ユダを除いて弟子たちがイエスのもとにいるとき、イエスは新しい掟を弟子たちに与えと言われる（⇒34節）。

「新しい掟」という言葉に、深い意味が込められている。掟の根本は愛にあるということは、既に語られていた。掟の根本は「義務」と考えていた当時の人々にとって、それは確かに革命的な新しさであった。けれど本当の新しさは、主がここで「わたしがあなた方を愛したように」と言われていることにある。キリストの愛が、すべてを新しくしたのだ。キリストの愛が、一切に先行する。根本なのだ。ヨハネは手紙の中で言っている（⇒Iヨハネ4章9）

掟に対しては人は服従しかない。人々はそのことを良く知っていた。掟はそれに従うことを求めるだけで、従わなければ掟違反として裁く。愛もそうなのだろうか。「わたしがあなた方を愛したように」ということが、キリストの愛が新しい掟だというのなら、それも、私たちには選択の余地がない、ただ従うしかないことなのだろうか。そうなのだ。愛には従うしかないのだ。「愛せよ」という言葉にも従うしかないのだ。

けれど、このように命じるお方が誰であるか、ということにこそ、私たちは注目し、集注しなければならない！そのすべてを包んでいて下さるお方が、すべてを包んで、絶えず方向を示して下さる。愛には未来があることを示して下さる。「わたしがあなた方を愛したように、あなた方も互いに愛し合いなさい」。必ず、この掟が、完全に成就する時が来る。キリストにおいては、十字架の愛によって既に成就していて、キリストは既に、愛の勝利の栄光の中に輝いておられること、そこに私たちは心を預けて行くのだ。

ささやかな愛、小さな愛なら、私たちの普段の生活の中に沢山あるだろう。朝、「おはよう」と挨拶をする。笑顔と笑顔で心が通う。心が通うところには愛がある。心にかかる人のことを思い起こして祈る。それも愛なのだ。「元氣ですか」と声をかける、それも愛。愛は沢山あるのだ。自分で思っている以上に、ささやかな愛で互いを支え合っている。愛の掟、愛の定めの中に生かされているからである。キリストが、その掟として、その定めとして、人の集

いの真ん中に、人と人の只中に生きていて下さるからである。

だから、葛藤を抱え込むときも、いつかそれが氷解することを、私たちは信じるのが赦されている。それに信じて、その葛藤を委ねることを赦されている。キリストがすべてを包み込んで下さるからだ。ヨハネ黙示録では、その日その時のことが語られている。すべてが氷解し、神の中で一つとされたときのことが。

見よ神の幕屋が人の間にあつて、神が人と共に住み、人は神の民となる。神は自ら人と共にいて、その神となり、彼らの目の涙をことごとくぬぐい取って下さる。もはや死はなく、もはや悲しみも嘆きも労苦もない。最初のものは過ぎ去ったからである。(黙示録 21:3-4)。

★分級への展開

さんびしよう

*讚美歌は”こどもさんびか” (日キ版) より

□ 51 番 (1, 2)

□ 100 番 (改訂版)

やってみよう

文字迷路

キーワード 互いに愛し合いなさい

たてとよこは進めます。斜めには進めません。

ゴールを目指してください。



話してみよう

- ・ イエス様が愛してくださったようにお互いに愛しあうにはどうしたら良いでしょう。